第1章

海軍特別年少兵の記憶

誰もが日本の勝利を信じ、国に尽くし、耐え忍んだ時代があった―

14歳で軍隊へ

昭和17（1942）年2月、中村喜一（なかむらきいち）さんは14歳のときに自ら軍隊へ志願しました。当時、日本の戦況は芳しく、日本全体が戦争へと突き進んでいた時代。中村さんは何の不安も抱かずに、「いつか国のために戦わなくてはいけないのなら、早く志願して、上を目指そう」と海軍の門を叩きました。

昭和17年9月、第一期海軍特別年少兵として佐世保（長崎県）の海兵団に入団。翌年7月、レーダーを扱う電測員になるため、横須賀通信学校（神奈川県）へ進みました。

通信学校では、体を使った訓練そっちのけで、一日中、勉強に打ち込みました。「とても大変でしたが、戦時中とはいえ青春時代。修学旅行に行ったり、仲間と泳いだり、山登りをしたりと、いい思い出もあります」。

死を覚悟したビルマ行き

しかし、半年間の訓練を終えた中村さんに下されたのはビルマ（現ミャンマー）へのレーダー設置の命令でした。命の危険が伴う任務に「もう生きて日本に帰っては来れないだろう」と覚悟を決めたと言います。

昭和19（1944）年2月、中村さんはビルマのラングーン（現ヤンゴン）に配属されました。レーダーを設置する場所が船着き場から200mほど離れていたため、船から機器を運ぶための道路作りに着手します。

ビルマ人と共に作業し、酒を酌み交わすうちに、中村さんとビルマ人は固い友情で結ばれていきました。マラリアの薬をビルマ人に渡すと、お礼に鶏や卵をもらっていたと言います。「戦時中でしたが、ビルマで食べ物に不自由したことはありませんでした」。

▲海防艦 221 号の仲間と共に。中央が中村さん。昭和 20（1945）年 5 月撮影

▲海防艦 221 号（撮影地：佐世保）

▲一等兵曹と二等兵曹の階級章（左から）

▲海軍特別年少兵の慰霊碑（佐世保）

ラングーンに配属されてから半年後、ようやく道路を完成させた矢先、思わぬ知らせが舞い込みます。機器を積んだ船が敵船に撃沈されたのです。

仕事を奪われた中村さんは日本へ帰還することに。昭和19年12月、佐世保に到着。生きて日本の地を踏むことができました。

2泊3日の休暇が許されると、すぐに古里へ戻りました。もう会えないかもしれないと思っていた家族は、中村さんの元気な姿を見て、泣いて喜んでくれました。

初めて体験した本格的な戦闘

その後、中村さんは新潟県で造船中の「海防艦221号」でレーダー設置にかかわり、昭和20（1945）年4月、竣工と同時に電測員として艦に乗りこみました。海防艦は大湊（青森県）を母港として北海道から東北を警備していました。

昭和20年7月14日、釜石港（岩手県）に停泊していた海防艦にアメリカ軍のグラマン（艦上戦闘機）およそ60機が襲い掛かります。海防艦の戦闘員は果敢に応戦するも、次々と敵の銃弾に倒れます。弾の雨が降り注ぐ中、中村さんも機銃などの弾丸を運びましたが、1時間ほどの戦闘で6人が戦死、多くの負傷者が出ました。「甲板は血の海で地獄のようでした。血で滑らないように、大量の砂をまいて戦いました」。

しかし、グラマンが去ってからが、本当の地獄の始まりでした。敵の艦船が釜石本土を狙って、艦砲射撃を始めたのです。耳をつんざく、雷のような音が鳴り響き、釜石のまちは火に包まれました。「製鉄所の強大な煙突が何本もドミノ倒しのようになりました。反撃を試みましたが、銃弾が敵艦に届かず、打つ手なし。悔しい思いをしました」。

敵の砲弾が海防艦の前方に着弾し、何本も水柱が上がりました。「艦長の号令で、後退したため、難を逃れられました。この決断がなかったら、私も生きてはいなかったでしょう」。

2時間の砲撃で423人の一般人が命を落としました。一カ月後の8月9日、釜石は二度目の艦砲射撃を受け、271人の一般人が死亡。まちは壊滅的な被害を受けることになります。

戦後を生き抜いて

昭和20年8月15日、ついに終戦の日を迎えます。「終戦の玉音放送を聞いたとき、正直ほっとしたんです。これで命が助かったと思いました」。

戦後、海防艦は外国から日本へ戻る兵士などの引き揚げ船として、活躍。昭和22（1947）年1月まで中村さんも運行に携わりました。その後、レーダーの知識を生かし、電力会社に勤めながら、夜間学校を卒業。定年後も80歳まで電気関係などの仕事を続けました。「若い頃からずっと働いてきたので、何かしていないと落ち着かないんです。戦時中を生き抜いたことで、根性が身に付きました。今の若い人は少し辛抱が足りないように思います。もう少し自分の気持ちを我慢できたら、犯罪も起きないのではないでしょうか。でも、戦争はもうたくさんです。どんな理由があっても戦争は正義ではありません。相手を支配したいという欲でしかないのです」。

88歳と高齢になった今でも、毎年、亡くなった仲間の慰霊のため、各地を訪れる中村さん。「年を重ねても、戦争の記憶は鮮明に覚えています。戦争で亡くなった多くの人のためにも、未来を生きる若い人たちのためにも、決して戦争を繰り返してはいけません」。

INTERVIEW

中村喜一（なかむらきいち）さん（辻町）

昭和 2 年生まれ。14 歳で海軍特別年少兵に志願。横須賀通信学校でレーダーを学び、ビルマへ配属。昭和 20 年、海防艦 221 号に乗船中、釜石で艦砲射撃にあう。現在も慰霊のため各地を訪れている。